十月十日　夕刊

常磐毎日新聞

日曜祭日の翌日休刊

定價一部金五拾錢　一ケ月金五拾錢　郵送五錢
廣告料五號十二字詰一行金五拾錢
發行兼編輯人印刷人　平野　茂
福島縣石城郡平町長橋町三五
發行所　常磐毎日新聞社
電話六〇二〇番
印刷所　常磐毎日印刷株式會社

今の紫

古代の紫（一）

城山六八翁

御目ざめの鐘は智恩院
聖護院
いでゝ見たまへ紫の水
晶子

何といふ婦人らしい、情調のよい歌であるであらふ。併し紫の水……何時の頃であつたか。秋は江州長濱から、汽船で今津へ向け、琵琶の湖上を渡つて、船は北へ北へ西へ西へと、竹生島目掛けて進みました、鏡の様な湖面は、船の進みにつれて時ならぬ波を起して艫ではそれが午後の陽をうけて、逆立つ小波もうねりの大波も飛び散る紫の管玉眞玉となり、ほんのり淡い紫の水晶の山でも渉つて行くかの如くに見えました、何んといふ美しさであるであらふ。皆の人にもこんな光景、此紫の水を見せたいものだと甲板に立ちつくしました。

白髮三千丈とは詩人が唯其心持を歌つたものだが、此紫の水！紫の水！それは如實にあり得るもの、黎明の曙光　山の端を離るゝ旭の光を受けた水は紫にも見えたであらふ。紫はホントに良い色だ！。西洋ではフニシヤ全盛の頃、海貝の汁から紫染をしたといふことで、それは四千年も昔の又昔の事であるが日本としては今から一千三百三四十年の昔冠位十二階を定められ、當時染殿を宮中に設けられたといへば、此紫染は勿論既に此頃からあつたであらう。大化に入つて衣冠の制を更め深紫、淺紫の服色が定められ藤原鎌足に紫冠を授けられし事などが舊記に載せられてある。然して此むらさきの染料としては、むらさき草其者が之に使用せられた事は左の詠歌に明かだ。

託摩野に生ふる紫衣に染めて末だ着ずして色にでにけり　笠女郎

味人（うまびと）の衣そむてふむらさきの心にくみておもほゆるかな　麻田連

むらさき草は和名を『むらさき』といふ、往時奥州、薩州、和州、河州等から多く產出せられたもので延喜式にも甲斐國八百斤、相模國三千七百斤、武藏國二千二百斤、下總國二千六百斤、常陸國三千八百斤、信濃國二千八百斤、上野國二千三百斤、下野國千斤を供進する事が規定してある。

此むらさきなるものは古來非常に賞美せられ、王朝時代には專ら朝服の染色に用ゐられ、就中延喜の頃には之が染法は最も研究もせられ應用もされた事で、深紫、淺紫、深滅紫、中滅紫、淺滅紫、むらさだのと此むらさき染のむらさき草の用量などが延喜式に規定せられ、尙深緋色にはむらさき草と茜草が併用さるゝ事なども記されてある。此等の色は主に皇室中心の貴族の位階服に用ゐられし如く、深むらさきは一位の人の袍の色で是は禁色として二位三位の人は淺むらさきの袍を着た。即ち普通の中むらさきで尙色淺きものは之を『えび』むらさきなどゝいつた。

唯かすむ山下水のかきつばたむべえびうめと色に咲きにけり　源仲正

枕草にもむらさきなるは何れも〳〵もめでたし花も糸も紙もむらさきの花の中にはかきつばたぞすこしにくき色はめでたしなどと書き藤の式部が源氏四十五帳を書いて、むらさきの上の事をわけて心をそへ書けるばかりに媛の名にさへむらさきを冠らせ紫式部の名は今にも傳はる樣になつた事は人の知るところでコト程左樣にむらさきの良は世に尊きものとせられた。

ノート

帶芯など洗濯して元通り固くするには生麩五匁片栗粉六匁水一升の割合で煮た糊を使つて張るとよい

○○○

早くも四倉築港に失敗の第一聲揚る

折角の浚渫船は故障續出で作業休止の狀態

工費一萬圓を投じた四倉漁港の浚渫船は去る七月下旬組立を終り船溜場の浚渫作業に取りかゝつたが設計の不備から屢々故障起り最近は運轉不能に陷り浚渫作業は休止の狀態にあるので關係者は非常に狼狽目下第二の浚渫船建造の設計を急いで居るが或ひは年内に作業に從事する事は困難ではないかと見られ非常に憂慮されて居る

第一校の新記錄競技

來月上旬開催

平第一小學校では來月上旬校内公レコード作製競技會を催すが種目左の如くであると

五十米　百米　二百米
四百米　八百米リレー
四百米ハードル　走巾走
高三段　ボールスロー

△府縣對抗　(平商)木田英夫　安島賢治(磐中)小川亨　川隅英範(田中)櫛田隆義　植村正

榮冠をめざし平商選手出發

來る廿五日午後三時半室原教諭に引率され

既報過般の縣下明治神宮豫選庭球大會に見事優勝した本縣中等學校庭球界に於けるナンバーワン平商の安島木田組は來る二十七日より一週開明治神宮コートに於て開催される全國中等學校庭球大會に本縣代表として愈々廿五日平發午後三時二十三分の上り列車で室原教諭引率の下に晴れの壯途に上る事になつたが平商は府縣對抗大會に大將組として磐中及び田中と共に躍する事になつただけに其使命重く大なものがある因に本縣代表のメンバーは左の如し

△ダブルス　(平商)木田英夫　安島賢治(磐中)小川亨　川隅英範(田中)櫛田隆義　植村正(保中)佐藤勢治　横山善治(福商)伊藤善二　高野祐二郎

△シングルス　(平商)木田英夫　同安島賢治(磐中)小川亨　同川隅英範(田中)植村正

郡聯合訓練

郡南で發火演習

來月廿二、三の二日間

既報郡下四十六ケ町村青年訓練所二千餘名參加の郡聯合青年團發火演習は來る十一月二十二、二十三の兩日勿來泉間に於いて拂曉戰其他華々しく開催終つて植田小學校庭に於いて觀兵式を行ふが來る十六日には磐中大井川、平商駒場の兩配屬將校及び藤田分會長が地形偵察の爲め勿來方面に出張すると

平第一校のラヂオ体操

平第一小學校では兒童体育增進の爲め昨九日より毎朝會の折ラヂオ体操を行ふ事になつた

産組職員講習

石城産業組合部會では各町村組合の幹部職員の事務監査技能の向上を圖る爲め來る十八、十九の兩日團体事務所樓上で講習會を開くが講師は縣小松農林主事である

各校教員補充

過般退職された平第一小學校坂内キノ訓導の後任として新潟縣長岡小學校の佐藤ユキヲ氏及び休職された平第二小學校星訓導の後任として郡山市金透小學校の清野兵衛氏、目下病氣欠勤中の同校米本訓導の代りとして平町八卷陽太郎氏が本日夫々着任された

晩秋繭市場は幾分持尚す

……だがまた／＼安値……

依然漸落を辿つてゐる石城地方に於ける晩秋繭は九日になつて若干持直し前日に比し高値氣を示したが然しこれは一時的のもので再び安値になるだらうと養蠶家は悲觀して居る、尚四倉繭市場九日の取引は總貫數千二百六十三貫で相場は高値三十八圓五十錢、安値三十二圓、買馴三十五圓

近縣中等校

陸上競技選手決定

磐中及び平商競技部では來る十七日福島高商主催の下に開催される近縣中等學校競技大會に出場すべく目下猛練習中であるが兩校に於ける出場選手は左の如くである

(磐中)百米金成令宣　(平商)百米齊藤三雄　走巾跳同人　八百米三部幹夫　千五百米同人　二百米蒲田力之助　四百米同人

神谷射撃場

今月下旬竣工

既報石城郡在鄕軍人分會が經費四百餘圓で神谷村小學校裏に新設する事となつた標的三個巨離二百米の射撃場は去る八日より着工したが今月末竣工する豫定なので來月上旬射撃大會を開催する豫定であると

産組部會幹部會

石城産業部會では來る十四日午後一時より部會樓上で幹部會を開き十一月中に開催される秋季總會に就いて打合せをなす

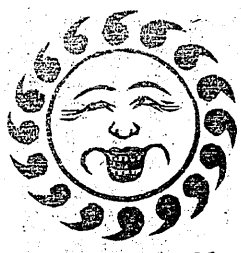
赤井嶽參拜團体

平町長橋町の廿日會では目下關伽井嶽藥師參拜團体二百名の募集中であるが會費は三十錢で出發は來る十五日午前一時であると

太陽顔ソース

御存知ですか！
太陽顔ソースの
風味を!!!
◇是非御試下さい

一本日質品
太陽顔ソース



平一丁目(電話二二二番)
小川屋本店
平各販賣店

品質第一
電話二六八番
平搾乳所
平町・九品寺前

秋……と……カメラ!!!
聞いて……見て……使つて驚く
MS カメラの輕便さ!!!
これでは誰にも良く撮たる筈です
題材豐かな行樂の秋……
今こそカメラ絶好のシーズン
どなたもゼヒMSカメラで朗かに
各種カメラ特約店
平驛前
いづみや玩具店
カメラ部

某大事件突發？
判檢事一行活躍
關係者數名强制收容さる

平檢事局三堀檢事及び荒井豫審判事は本日午前九時半緒形監督書記を始め桑名高木矢吹の各君記と共にタクシーを雇つて突然平驛前某飲食店同長橋町某綴驛前某氏の家宅捜策を行ひ夫々關係書類を押收して正午引上げたが事件の內容は某會社に對する恐喝事件らしく既に關係者飲食店主を除く外二名は昨九日夜荒井豫審判事の拘引狀に依り平刑務所に收容されて居り事件は益々擴大する模樣なので關係者は戰々々恟々として居る

內鄉村の不良
四名を檢擧
今朝寢込みを襲ふ

最近內鄉村綴縣道を中心にして不良の徒が横行良家の婦女を脅迫金品を强要或は無錢飲食し歩いてる軟派の一團あるのを平署で探知十日朝彼等の寢込みを襲つて連累者四名を檢擧目下川島警部補係りで嚴重取調べ中だが彼等の外に一味は相當ある見込みで引續き內偵中

磐女校バザー
賣上げ二千圓
ナント豪勢なもの

昨日午後三時盛會裡に終つた磐女バザーの觀覽者は第一日男二五五、女一二〇五子供一二七〇、第二日目男三八、女三二八、子供一五總計三千二百四十九名に達し頗る人氣を博したが各出品物の賣上は二日間を通じ一千九百九十八圓七十二錢の巨額に上つた

磐炭相撲大會
石城郡內鄉村磐城炭鑛體育部では來る廿九日午前九時より殘野記念會館前廣場で相撲大會を開くと

手長女給
財布を拔く
同僚のも拔取る

平町四丁目カフエーボタン事片寄半三郎方女給川西花江（一五）假名は七日來店した神谷村農山野邊文吾（三六）が落した八圓在中の墓口を拾得横領した外同僚から數回にわたつて金錢や衣類を拔き取つた事發覺平署に檢擧された

根岸地內で
自動車丸燒
運轉手火傷

石城郡湯本町字天王崎片寄自動車店運轉手木田唯祐（三三）が八日午後六時半頃乘合自動車を運轉して上遠野村字下根岸地內縣道を全速力で進行中突然汽罐部が爆發し鐵骨部だけを殘して車体を燃盡したが運轉手は手足等に全治二週間の火傷を負つたが原因は迚轉器の塵擰から火を發してガソリンに引火した爲めであると

鹿島村にまた〳〵
豚コレラ發生
當局豫防に大童べ

石城郡鹿島村大字上倉持字畑中農高萩兵部方では飼育中の牡豚は昨九日眞性豚コレラなる事判明し届出により平署十屋技手が即日屠殺處分に附したが同部落には去月廿八日に四頭の豚コレラが發生した後の事とて同村の養豚家は嚴重な豫防に努めて居る

小川江筋改修
着工不能に陥る
眞似井部落民の横槍で

既報小川江筋の改修工事は工費三十万圓を以つて今明年に繼續して行はれ本年度は豫算十萬圓の工事に着手すべく過般來設計に着手したが最近同工事に關係して居る平窪村地內眞似井川の排水路設計の事から組合幹部の專斷行爲を排斥せんとする全組合員との間に紛糾が行はれて居る結果工事設計は未だに完成せずにおり當局の紛糾は益々擴大せんとして居る模樣なので成行は注目されて居る

赤井助役問題
益々紛糾
新人物現る？

石城郡赤井村では助役後任問題で目下吉田豊氏重任說と松崎松太郎氏起用說の二派にわかれて居るが一部では新たに新人物を選ぶべきであると漏らしてゐるので或は意外の人物が就任するのではないかと成行を注目されて居る

上遠野の火事
提灯の置忘れから

石城郡上遠野村字根岸伊藤雅壽方物置小屋から八日午後九時頃發火し住家一棟非住家一棟を全燒して十時鎭火したが原因は提灯の置忘からで損害目下取調中である

美友會展覽會
繪畫同好者より成る美友會の第十五回美術展覽會は來る二十五日より五日間平第三校新築階上に於て開催するが出陳点數は約六七十点で即賣を行ふと

平窪產組總會
石城郡平窪產業組合では來る十七日午前九時より同村小學校に臨時總會を開き午後は同場で縣の小松農林主事の講演會を行ふ

遊戲ダンス豫習
平第二小學校では秋季運動會も愈明日に迫つたので本日午前九時より平館の音樂隊を招き遊戲及びダンスの豫行演習をなした

平澤君の『双踊』入選
第三回目の入選

平町鍛治町出身の平澤信男君（二九）は目下東京に於いて鐵道省に奉職中であるが職務の餘暇に製作中であつた彫塑『双踊』を帝展に出品せる處見事に入選し來る十六日より東京上野美術館に開催される帝展第三部に出品される事になつたが同君の入選は是で三回目であると

十三日會例會
三堀檢事の講演

平町十三日會では來る十三日午後七時よりマルトモホールに於いて例會を開き平區裁判所檢事三堀博氏の『平町地方に於ける最近の犯罪を中心として』と題する講演會を催すと

平職業紹介所報告
回 人を求める方

△店員　二十二迄　月五六圓　外面談（双葉郡某）
△大工　三名　四十迄　尋卒日給一圓（湯本町某）
△女中　三十迄　尋卒　外面談（小野新町某）
△外交員　四十五迄　四割給す（平某材木店）

回 職を求める方

△職工　二十七才　尋六修給料面談（赤井村某）
△自動車運轉手　二十二才高卒　給料面談（平町某）
△女中　二十才　尋卒　給料面談（好間村島）

JOIK 明日のラヂオ
仙台放送局
十一日

天氣豫報
今晚も明日も北西の風天氣良くなる

今晚の部
▼後六、〇〇（子供の時間）お話「騎兵と東北地方」陸軍少將大泉製之助
▼後六、二五　基礎佛語講座（九）目黑三郎
▼後七、三〇　講演「日本築城史上の仙臺城」東北帝大教授文學博士大類伸
▼後八、〇〇　謠曲「松風」梅若實邦外大勢
▼後八、四〇　箏曲「さらし」箏小林巖　同川島澄勢　同針生てる子
▼後八、五五　民謠「さんしぐれ」外八ッ　唄吉木桃園外大勢
▼後九、三〇　時報　ニュース　氣象通報　番組豫告

明日の部
▼前六、三〇　基礎英語講座（十四）岡倉由三郎
▼前七、〇〇　第六師團凱旋實況（門司稅關埠頭より中繼）
▼前九、一〇　料理獻立「蟹のなんば煮」松本良雄
▼前一〇、三〇　家庭メモ
▼前一〇、三五　家庭講座
▼後〇、〇五　滿洲より
▼後一、五〇　野球試合實況東京大學野球聯盟リーグ戰（早稻田帝大）神宮球場より中繼
▼後二、〇〇　家庭大學講座「誇るべき日本の花鳥畫に就いて」西澤笛畝
▼後六、〇〇　子供の時間　少年運動講座「野球の誕生」橋戸頑鐵
▼後六、二五　趣味講座「芭蕉忌を前に象潟の舊蹟を語る」飯野哲二
▼後七、三〇　講演「氷河遺跡の話」東北帝大教授理學博士高橋純一
▼御八、〇〇　義太夫「御所櫻堀川夜討」辯慶上使の段　淨るり豊竹新之助　三味線吉田政枝
▼後八、三〇　新內「傾情音羽瀧淡島の段」淨るり富士松長門太夫　三味線龜三郎　上調子昇朝
▼後九、〇〇　獨唱とチエロ獨奏　獨唱長門美保　チエロ高勇吉　ピアノ伴奏高木東一

鉄鎖紀文錄

【禁無斷轉載上演映畫】

寶井馬琴演
山本英春畫

第六十一回・血に飢ゆる村正

七首に殘る血糊

次郎吉は倒れたる三四郎の上へ跨り

次『ヤイ金せえなけりやア殺す氣にやアならねえが金が敵と思ふが宜い』

と云ひながら用意の合口で一刺し二刺しさし通しました、元より色に耽つて主人の金を盗まうといふ心得違ひの三四郎ゆゑ中々腕づくでは叶ひません遂に留めを刺して終ひ懷中にあつた金は殘らず奪ひ取り死體は猫又坂から小屋の下へ投り込んで了ひました、其儘何食はん顔をして歸つて參りましたが女房のおきくはそんな事も知らず大層歸りが遲いから案じて居る所へトント／＼トン／＼

菊『次郎さんかえ』

次『俺だ開て呉んねえ』

菊『今開けるよ』

といひながら門の戸を開けて這入りながらも邊りを見廻して居る次郎吉の顔を見て

菊『どうしたんだえ誰か尾いて來たのかえ』

次『ナニ誰も尾いちやア來ねえが餘り遲くなつたから……』

菊『何處迄送つて往つて上なすつた』

次『ナニ宜い鹽梅に表へ出て然うさ三丁も往つたらうが板橋へ歸る駕籠があつて其の籠へ乘らせてやつた、それから文治の所で馬鹿話をして遲くなつた』

菊『然うかえそれなら宜いがお前又心得違ひの事でもしやアしないがと先刻から苦勞で堪らなかつた此の通り身重になつてゐる故詰らない事をして呉んなさると親の因果が子に報ひるで不具でも生れると佐野の親父さんに言ひ譯がない』

次『何を詰らねえ事を言ふだ酒を　杯つけてくんねえ』

菊『ハイ』

と飲み餘りの二合ばかりの酒を溫めてやつたそれを飲んだが何だか忌な心持で「サア寢やう」と直に枕に就て終ひました、きくは流石目明しの鐵藏の娘だけあつてどうも歸つて來た次郎吉の擧動が訝しいと思ひ先へ寢かして跡片附をしながら樣子を見て居ると寢たばかりで次郎吉は「ウーンどうぞお侍勘忍して呉んねえウーム苦しいウーム」と迂鳴り苦しんで居る樣子に彌々おきくも心ならず次郎吉が床の下へ隱した合口をソツと取出し鞘を拂つて見ると拭つては來たが幾か油が殘つて居ると見えてギラギラ光つて居る樣子扨てはと思つて段々探して見ると金は一文もございません是は次郎吉がおきくへも見せぬやうに家へ入る時皿小鉢の乘つて居る棚の隅へ隱して來たものゆゑ見當りません

菊『次郎さん／＼確乎をしお前夢でも見たのかえ』

と搖り起され

次『アヽ手拭を取つて呉んねえ酷い汗をかいた』

菊『お前先刻のお侍を殺して來たね』

次『馬鹿をいへ壁に耳があらア何を詰らねえ事をいふのだ』

菊『イヽエお前殺して來たに相違ない今寢言にお侍勘忍して呉れ出來心だ苦しいと云つた時私やア變だと思つてお前の隱して置いた合口を拔いて見れば血が附いて居る樣子私も目明しの娘だお前が何日まで隱し立てをすれば私も其つもりで此事を家主へ訴へるよ』

と云はれて次郎吉は吃驚

次『汝合口や何かを見たのか』

菊『ハイ』

次『見られちやア仕方がねえ此の二月三月取られ續けで首も廻らずどうしやうと思ふ所へ先刻の侍金があると云ふ事を聞いて此いつア一番やつた事のねえ荒仕事だがやつて見やうと思つたのが全く天魔が魅入つたのがお前が表向きにするといふが乃公ア人を殺して金を取つたのだからどんなに御處刑になつても仕方がねえが腹に子供はあるし俺が死んだ跡で矢ッ張り困るなアお前だ夫より向後は心を改めて律義に稼いで親父の所へ歸るやうにしやうから此の事ばかりはどうか默つて居て呉れろ』

と涙を流して次郎吉が話したに依つて流石夫婦の情合で見す／＼困るといふ事が知れて居りますゆゑおきくも今は仕方がなく

菊『して了つた事を今更いつても仕方がないがからどうぞ次郎さん是から惡い氣を止めてアノお方の回向でもして上げて下さい』

と漸うおきくも落着いた樣子茲で次郎吉も喜び口を拭いて知らぬ顔をして居りました　その内猫又の崖下に侍が殺されてゐると云ふ評判になり直に岩城左京亮の家來が參つて見れば金を盗んで逃げ去つた山田三四郎と分り死骸はお取捨に相成り兄三右衛門は是がために浪人をいたしました

服倉小黑
賣出し
小學生　中品　一圓
小學生　上等品　一圓六十錢
中學生　特製B　三圓
中學生　特製A　三圓九十錢
紺ヘル　三圓二十錢ヨリ
平町　正札堂洋服店　電四三六

木村外科醫院
平町五丁目橋際
電話九〇三番

専門　内科一般
宅診　往診
内科は何でも診療致します
呼吸器病ばかりではあまりません
平町南町六五
川井内科診療所
電話一八一番
醫學士　川井重之
女醫　川井安子

玉炭　石炭
コークス
平驛前
阿部石炭商店
電話三七番

お惣菜用
さつま揚
吉原揚
平町一丁目
かまぼこ製造
お惣菜
天ぷら
電話一四一番